

服部英雄著

蒙古襲来と神風

中世の対外戦争の真実



中公新書

2461

はじめに

太平洋戦争が終わるまでは、大人も子どもも「神風」を信じていた。嵐による蒙古襲来（元寇）での勝利である。無謀な戦争を、無批判に国民が支持しつづけた背景の一つに、この不敗神話があった。戦争最優先の全体主義国家はあらゆる批判を許さなかったとはいえ、国民も戦争を終わらせようとは考えず、努力も行動もしなかった。

国家の歴史認識の原点に「神風」があった。両度の蒙古襲来、すなわち文永の役（文永戦争）、弘安の役（弘安戦争）での敵国退散・防戦勝利に、「神風」なる摩訶不思議な言葉が賦与され、その後、日本の宗教家・思想家・歴史家が、日本は神の国であるという大前提のもと、神風史観を順次形成していった。神風史観・神風思想は近代日本の動静に大きな影響を与えた。なぜ国民はこのような非科学的な歴史観を受容したのだろうか。徹底的な検証を加える必要がある。

神風史観によって、蒙古襲来は以下のように解釈された。
神風によって、蒙古が退散した。つまり、二度ともに神風が吹いて、元寇は決着がつく。

文永の役では敵は一日で引き返し、弘安の役では嵐によって、肥前鷹島に集結していた敵船が沈み、全滅した。

今でもこのように書いている教科書は複数あって、文部科学省の教科書検定を堂々と通過している。検定を通過する理由は、辞典や一般書にも書いてある通説だから、とのことである。たしかに歴史家の多くも、この「通説」を信じていて、幾度となく刊行されてきた「蒙古襲来」についての一般向けの諸著作・概説書でも、アカデミズム側の人物、つまり「学者」多数が、そのように書いてきた。しかしその根拠は、つきつめると存在しないものだった。本書はこの誤りを正していく。学校教育を通じて、多くの人が信じてきた蒙古襲来像は、虚像、偶像なのだ。

神風史観によれば、必ず嵐（神風）がやってくる。そして決着がつく。ところが事実はさまたまに違う。文永の役についていえば、一日で敵が帰国した原因とされる嵐はその日、つまり赤坂鳥飼合戦があった文永十一年（一二七四）十月二十日夜には吹いてはいない。一夜で逃げ帰った、九州本土では二十日の戦闘のみだった、と記す史料は『八幡愚童訓』なのだ。そこには嵐（台風）が原因とは書いていない。では、なぜ帰ったのか。「神の戦い」があったからだ」と説明している。宮崎宮（神社の名称としては宮崎、地名としては箱崎が一般的）が蹂躪され、怒った八幡神が、夜中に白衣で蒙古に矢を射かけてきた。パニックになった

蒙古兵は、箱崎の町を燃やす火が海に映る（反射している）のを見て、海が燃えだしたと勘違いし、このままでは船が燃えてしまうと慌てふためいて逃げ出した。社殿を焼かれて怒った神が追い返すのだから、その夜のうちに、一日で追い返さなければならなかった。神威なのだから何日も後では困るのだ。ここでは嵐さえも登場しない。武士はさっさと逃げ出ししており、戦ったのは神だけである。荒唐無稽なこの物語のほかに、一日で帰ったと記すものはない。

つづく弘安の役では、たしかに台風が来たし、じつさいに鷹島沖に船は沈んでいる。蒙古は手痛い打撃を受けて不利になった。ただし鷹島に碇泊していたのは全軍ではなく、旧南宋軍（江南軍。蛮軍ともいう）であった。朝鮮半島の高麗を中心とする先遣部隊（東路軍）は、筑前国志賀島、つまり大宰府周辺の博多湾にいた。台風通過は弘安四年（一二八二）閏七月一日。その四日後の七月五日に博多湾・志賀島沖海戦、さらに二日後の七月七日に鷹島沖海戦があり、ともに日本が勝利した。嵐・台風が決着をつけたわけではなく、その後にも合戦は継続されていた。二つの海戦の結果、戦争継続は困難と判断した蒙古軍は、江南軍・東路軍ともに、鷹島・志賀島からの退却を決めた。

船が沈む理由は、多くは、老朽船に過剰に荷を積んだ場合とされている。近年、鷹島沿岸の海中で見えられた蒙古沈没船は、まさしくそれに該当していた。江南軍には、兵船（中